

揺さぶられっ子症候群 (Shaken Baby Syndrome) の4カ月女児例

小川 厚 児玉 隆志 藤原 千鶴
藤川 貞敏 満留 昭久

福岡大学医学部小児科学教室

要旨：揺さぶられっ子症候群 (shaken baby syndrome) は小児救急医療や小児虐待に携わる多くの人々の啓発活動により認知されるようになってきた。しかしながら、本症は外傷の既往がはっきりしない事や養育者の自発的な申告がない事などにより診断に苦慮する症例が多い。虐待を医学的に診断するためには医学的所見・検査が行われ、鑑別診断もなされて虐待の可能性が指摘されなければならない。今回、我々は突然の意識障害と呼吸不全により発症した本症候群の4カ月女児を経験した。発症時の頭部CT検査で上矢状洞・大脳鎌後部に硬膜下出血、前頭部脳溝の一部にくも膜下出血を認めた。また発症19時間の頭部MRI検査で拡散強調画像において両側頭葉、頭頂・後頭葉の皮質・皮質下深部白質に高信号を認め、この部位は1カ月後には多房性脳軟化に移行した。病歴上ははっきりとした揺さぶりの確認の取れない症例において、積極的な各種の頭部画像検査は本症候群の早期診断の一助になると考え報告する。

キーワード：頭部外傷、被虐待児症候群、眼底出血、慢性硬膜下水腫、硬膜下穿刺